様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ５ 月 １７ 日現在

機関番号：３１３０２
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2012～2015
課題番号：２４７３０４３２

研究課題名（和文）津波常襲地における被災経験の受容と克服に関する社会学的研究

研究課題名（英文）A Sociological Study on Disaster Suffering and Mitigation in Tsunami-Prone Societies

研究代表者
植田　今日子（Ueda, Kyoko）

東北学院大学・教養学部・准教授

研究者番号：７０５８２９３０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：東日本大震災が訪れる前から幾度にわたって津波の被災と回復を余儀なくされてきた歴史をもつ社会で、「未曾有」の規模と表現されてきた2011年の津波被害が、どのような社会的、文化的実践によって克服されようとしていたのかについて明らかにした。
集落単位での分析にこだわることで、被災前からルーティンとして執り行われてきた儀礼や祭祀が被災したコミュニティに果たす役割の重要さが明らかとなった。また「津波常習地」とはいっても、人間の寿命をゆうに跨ぐ間隔で訪れる災害へ警戒を伝えることの難しさも浮き彫りとなった。この伝承において必須となっていたのは、人間の寿命を凌ぐスパンをもつ有形無形の伝承媒体の存在であった。

研究成果の概要（英文）： Before the "unprecedented" scale of Tsunami hit many of the Japanese fishing vilages in 2011, some of them, in each history, had already gone through former tsunami, for example in 1896 and 1933 in tsunami-prone area called Sanriku region. The aim of this study was to explore the way such tsunami-prone communities cope with the situation that the hamlets themselves would have been hard to endure.
  Field research showed that: (1) the rituals or festivals, which were calendrical "routine" in their normal life, could contribute to rebuild the rhythm of their daily life in severely disaster-affected communities since it enabled them to foresee their realistic outlook in the chaotic situation. (2) Such tsunami-prone communities themselves played a role to inform them of the future attacks of tsunami transgenerationally because lifespan was often shorter than the historical intervals of past tsunami.

研究分野：社会学、民俗学、文化人類学

キーワード：災害常習地　災害文化　津波　集落の存続　災害脆弱性　災害からの回復力

１．研究開始当初の背景

東日本大震災の発生から１年を待たない時点で計画した研究であったが、当時は報道等で繰り返し「未曾有」の規模の津波であったことが強調されていた。しかし気仙沼を訪れて耳にしたのは、漁師たちの「沖出し」という慣習であった。大小の津波の際に、地震の発生から津波が到着するまでの間に、船を沖に避難させるというものであった。のちに本研究で執筆した論文中に何度も登場することになったが、地域社会や集落単位の経験から津波を捉え直すことで、決して「初めて」災害にあったのではないことを伝える災害文化のようなものを浮かび上がらせることができるのではないかと考えた。また、このような実践に学ぶことで、被害の甚大さや回復の困難さだけに光をあてる研究とは異なるアプローチが可能となるのではないかと思い至った。

２．研究の目的

この研究の目的は、災害常習地（とりわけ津波常習地）である三陸沿岸地域の生活世界に伝承されてきた浜や港、船で行われる祭祀や儀礼、慣習に着目することで、人びとが繰り返し経験してきた沿岸世界固有の危機的状況（海難事故、不良、海洋汚染、津波など）をどのように受容し、その後どのように再び海に寄り添う生活を取り戻すのかを明らかにすることである。

より後景にある研究関心としては、特に津波常習地の沿岸世界に生きる人びとにとって、海は生活の糧を豊穣にもたらすと同時に、破壊的な災禍もときにもたらす両義的な存在ということである。端的には「意のままにならない自然」といえるが、過去に繰り返し襲った津波だけではなく、時折海に命を奪われてきた海難史を調査対象に含めることで、人びとが海の両義性をどのように受容し、なぜ災禍ののち再び海辺の生活へと帰っていこうとするのか明らかにすることを試みた。

３．研究の方法

主に宮城県唐桑半島と岩手県重茂半島の津波常習地において、大きくは（1）海がもたらす《豊穣》の側面である漁業史、そして（2）《災い》の側面である災禍史を捉えることを試みた。

方法としては①漁協や役所に保管されてきた記録、市長村史、市町村議事録、漁協以外の漁業者の組織による記録の収集、そして②被災者および漁業世帯への聞き取り調査と③各集落での祭祀、儀礼への参与観察である。この作業を通して（1）被災前の平常時における年間の農業暦、漁業暦、祭祀暦をふまえ、(2）それぞれの集落単位の「津波史」をふまえ、(3）半島単位ないしは集落単位の「海難史」をふまえる作業を行った。これに加えて（4）東日本大震災を被災後、集落の回復・再建過程を並行して記録した。

４．研究成果

端的にいえば、この研究計画の遂行によって、大きくは以下の二つのことが明らかとなった。(1）津波常習地の集落において、それぞれの海は同じようにみえて、大きく異なっていたことが明らかとなった。外洋に面する集落、内湾を臨む集落、それぞれの祭祀もまた大きく違ったように、各集落ごとに人々が津波を凌ぐための技法は、場所を選んではじめて効力を発揮するものである。それは過去の津波がそれぞれの集落空間を媒介として伝承されていたことからも明らかとなった。この事実は、津波を経てなお、もとの集落のそばに戻ろうとする被災者をある程度合理的に説明するものであった。

（2）津波に限らず災害の被害を大きくしたり小さくしたりする要因は、地形など外在的な条件だけに限らず、人間社会の備えやその伝承のあり方にもある。これは人間の側が祭祀や儀礼を通して、あるいは日常的な集落空間の利用をとおして、絶えず災いへの備えを伝承・継承していたか否かに関わっていた。このことは、人間の側が被害を増幅しうることを伝えているが、同時に重要であったのは、災害への強さも弱さも、防災や減災が社会的実践であるかぎり、一定不変ではないことを伝えていた。かつての大災害を見事に回避・緩衝しえた集落においても、間断のない社会的実践が忘却される可能性があるということが明らかとなった。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　6　件）

① 植田今日子、来住者を閉ざした津波常習集落--津波で解散する気仙沼市唐桑町の一集落から、理論と動態、査読有、vol.7、2014、pp92-116
http://sce9b5cc6da99a5da.jimcontent.com/download/version/1458190701/module/12428975892/name/7.%E6%9D%A5%E4%BD%8F%E8%80%85%E3%82%92%E9%96%89%E3%81%96%E3%81%97%E3%81%9F%E6%B4%A5%E6%B3%A2%E5%B8%B8%E7%BF%92%E9%9B%86%E8%90%BD%E2%94%80%E2%94%80%E6%B4%A5%E6%B3%A2%E3%81%A7%E8%A7%A3%E6%95%A3%E3%81%99%E3%82%8B%E6%B0%97%E4%BB%99%E6%B2%BC%E5%B8%82%E5%94%90%E6%A1%91%E7%94%BA%E3%81%AE%E4%B8%80%E9%9B%86%E8%90%BD%E3%81%8B%E3%82%89%E2%80%A6%E6%A4%8D%E7%94

%B0%E4%BB%8A%E6%97%A5%E5%AD%90.pdf

② 植田今日子、どこまでが集落か--津波常習地の漁村集落にみる海の領域意識、歴史と民俗、査読無、vol.30、2014、pp171-188

③ 金菱清・植田今日子、災害リスクの“包括的制御”（特集 東日本大震災・福島第一原発事故を読み解く-- 3 年目のフィールドから）、社会学評論、査読無、vol.64(3)、2013、pp386-401
http://doi.org/10.4057/jsr.64.386

④ 植田今日子、なぜ大災害の非常事態下で祭礼は遂行されるのか（特集「社会問題としての東日本大震災」）、社会学年報、査読無、vol.42、2013、pp43-60
https://www.jstage.jst.go.jp/article/tss/42/0/42_43/_pdf

⑤ 植田今日子、なぜ被災者が津波常習地へと帰るのか（特集「環境社会学にとって『被害』とは何か」）、環境社会学研究、査読有、vol.18、2012、pp60-80
http://ci.nii.ac.jp/els/110009829277.pdf?id=ART0010338740&type=pdf&lang=jp&host=cinii&order_no=&ppv_type=0&lang_sw=&no=1463382810&cp=

⑥ 植田今日子、なぜ集団移転地は海が見えるところでなければならないのか--気仙沼市唐桑町舞根の海にみる領域意識、震災学、査読無、vol.1、2012、pp227-248

〔学会発表〕（計 8 件）

① 植田今日子、放射能汚染が耕作者に問うこと--福島県二本松市東和地区にみる“除染”のアポリア、日本文化人類学会第 49 回研究大会、2015 年 5 月 30 日

② Kyoko UEDA, Why do sufferers of great earthquake conduct the traditional events under evacuation orders? Lessons from tsunotsuki-bullfighting after the Niigata Chuetsu Earthquake, International Union of Anthropological and Ethnological Sciences Inter-congress 2014, 2014 年 5 月 15 日

③ 植田今日子・酒井朋子、記憶地図を描く--気仙沼市唐桑町宿における試み、2013 年度「東北民俗の会」10 月例会
（於：東北学院大学）、2013 年 10 月 19 日

④ Kyoko UEDA, Seawall Construction after the Attack of Tsunami : a mistaken boundary of fishing villages, 17th World Congress of the International Union of Anthropological and Ethnological Sciences in Manchester, U.K., 2013 年 8 月

⑤ 植田今日子、津波常習地の海にみる領域意識、関西学院大学先端社会研究所 2012 年度定期研究会（関西学院大学大学院 社会学研究科「エッジの社会学」研究会共催）
2013 年 2 月 23 日

⑥ 植田今日子、津波被災者が帰ろうとする海の領域意識、第 16 回常民文化研究講座「大津波と集落--三陸の集落に承け継がれるもの－」（神奈川大学日本常民文化研究所主催於：神奈川大学）、 2012 年 11 月 10 日

⑦ 植田今日子、自然災害の受容と災害パターナリズム--津波常習地の一集落の実践から、2012 年度東北社会学研究会研究例会（於：東北大学）2012 年 9 月 22 日

⑧ 植田今日子、The Right to Live by the Coast after an Experience of Huge Scale Tsunami: a case study of a fishing-village of the survivors of the Great East Japan Earthquake, The XIII World Congress of Rural Sociology in Lisbon, Portugal
2012 年 7 月

〔図書〕（計 4 件）
① 植田今日子、『存続の岐路に立つむら』、（単著）昭和堂、2016 年 3 月
ISBN:978-4-8122-1536-4
② 植田今日子、「避難生活下の祭礼とルーティンの創造」、橋本裕之・林勲男編『災害文化の継承と創造』（分担執筆、pp86-108）
臨川書店、2016 年 3 月
ISBN:ISBN978-4-653-04315-7

③ 植田今日子、「序章 特集の解題」「終章 災害の伝承媒体としての村落」『災害と村落：年報村落社会研究 第 51 集』（編者、pp11-25, pp263-304）農山漁村文化協会、2015 年 11 月
ISBN:978-4-540-15140-8

④ 植田今日子『更地の向こう側--解散する集落「宿」の記憶地図』東北学院大学トポフィリアプロジェクト（共編）かもがわ出版、2013 年 8 月
ISBN:978-4-7803-0620-0

〔産業財産権〕
○出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織

(1)研究代表者
植田　今日子　（UEDA, Kyoko）
東北学院大学・教養学部・准教授

研究者番号：70582930

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：